Ｉターン者にみる「自分探し」

周　藤　辰　也*

“The Quest for Self” in People Who Migrate to Rural Areas

Tatsuya SUTO

キーワード：Ｉターン　自分探し　つながり　地域住民とのズレ　危機感

Ⅰ　はじめに

近年、都市部では田舎暮らしに憧れを持つ人が増えてきているという。立川雅司は、国立国会図書館のデータベースを用いて「田舎暮らし」をタイトルとする書籍の刊行動向をグラフにまとめており、それによると1980年～1989年の刊行数が7点、1990年～1999年が5点、2000年～2005年が34点と、1990年以降、田舎暮らしに関する本の刊行が増えており、田舎暮らしへの関心が高まっていることがうかがえる（立川2005）。

こうした動きは、過疎に悩む地方にとっては、希望の光と映るだろう。筆者が暮らす島根県でも、過疎問題を抱える地域が多数あり、高齢化率が50％を超え20世帯未満の集落である「限界集落」が453も存在する。その島根県も、東京や大阪、名古屋などの都市で開催される就職フェアやＵ・Ｉターン向けイベントでＵ・Ｉターン相談コーナーを設置し、島根への移住を呼びかけている。直近の半年だけを見ても、東京や大阪などの大都市圏で開催されたイベントに島根県が参加した回数は15回を超える。他にも、移住者向けに情報誌を発行するなど、都市に向けて積極的に情報を発信している。過疎地域が、都市からの移住者を受け入れようと競うように打ち出す様々な移住者への支援策は、都市の人々の「田舎志向」に支えられているといってよい。

では、なぜ田舎に関心が集まるのか。高木学は、Ｉターンについて「自分を取り巻く社会環境や経済状況に左右されるのではなく、自分の価値観に従って、そのイメージを実現するための移住」と説明する（高木1999：122）。Ｉターン者は、かつて自分の夢の実現や可能性を求めて多くの人々が都会に行ったように、かれらもまた自分の理想などを追求して田舎へと移住している。つまり、Ｉターンは一種の「自己実現」や「自分探し」の手段ということになる。

しかし、自分探しの手段としてなぜ田舎を選ぶのか。それについてはまだ明らかになっていないように思われる。そこで筆者は、この点について議論するために、都市部から移住してきた、いわゆるＩターン者に聞き取り調査を行うことにした。この調査は、筆者の修

＊島根大学大学院生

士論文のために「Ｉターン者のライフスタイル」について、2011年9月～11月に島根県東部の山間部で実施したものである。調査は現在も継続中であるが、本稿では、現時点で見えてきたことから、今後の調査に向けての仮説構築を目指す。

Ⅱ　Ｉターンという自分探し

１．Ｉターンの動機

Ｉターン者は、なぜ田舎への移住を選択したのだろうか。調査では、60代のＩターン男性と、30代のＩターン男女に話を聞いた。

まずは、60代のＩターン者の事例１を見てみたい。

【事例１】

埼玉から夫婦で11年前に移住してきた60代の男性（以下、Ａさん）。埼玉では会社員として働いていたが、子どもが成人したのを機に家族に田舎暮らしの話を持ち出し、家族の反対もなく移住することができた。現在は果樹園を運営している。

Ａさんに、移住のきっかけを尋ねたところ、次のような答えが返ってきた。

「もともと埼玉にいる時も、家の土地の周りに実のなる果実を１本２本、全部で20種類近く植えていましてね。知り合いから畑を借りて野菜も作ってと、土日は百姓をやっていたわけです。街しか見えない所だったから山に住みたいってのが昔からあってね、ある程度体力があるうちに山の中で農業みたいなそういうことをしたいと思ってたんです。」

また、移住先での生活については、次のように述べている。

「（周囲の人の）目は気にならないですね。うちは二人ともあまりくっつかず離れずもしてないお付き合いだからね。あんまりくっついちゃうと大変だと思う。せっかく埼玉からこっちに来て、この自然のところで楽しんでるのにね、変なとこで煩わしても首突っ込まれるからある程度距離を保ってます。」

Ａさんは、昔から「山の中で農業をして暮らしたい」という思いを抱いており、その夢を実現するために移住してきている。果樹園を営んでいるものの、売上げや利益などは求めておらず、ずっとやりたかった農業を楽しくできればそれで良いという気持ちでいる。そのため、他人との関わりについては全く気にしておらず、むしろ他人に首を突っ込まれることなくのんびりとした生活に満足感を感じていた。

小見志郎は田舎暮らしを志望する都市住民のニーズを調査した結果から、「団塊の世代を中心に‘田舎暮らし’をしたいという願望が根強くあり、ゆっくりとした田舎暮らしへの願望が高まっている」（小見2007：23）と述べる。Ａさんのような動機は、小見が示す高年層に見られるＩターンの典型であるといえよう。

これに対し、より若い年齢層（30代）のＩターン者は、異なった動機を述べる傾向が見られる。

【事例２】

大阪から単身で移住してきた30代男性（以下、Ｂさん）。大学卒業後は東京などでWebの運営や制作を行う仕事に携わっていた。島根県へは、ホースセラピー（心や体調に不調を持っている人を馬との接触させることで癒しを与える人）という仕事をするために移住。その後、生活の糧を得るために、地域おこし協力隊[1)]となり、隣町の温泉施設で勤務。自らの提案で温泉施設の一画に、観光客向けに石

釜を使いピザ焼き体験ができるサービスを始めた。ピザ焼き体験の中で生まれる観光客との様々な会話を通して、売る―買うだけではないつながりを築き、物よりも人のファンを作りたいとの思いが体験型にした理由である。

Bさんは、移住のきっかけについて次のように述べる。

「僕が田舎志向とかなるようになったのは、リーマンショックとかあのへんの2008年ぐらいです。あと毒入り餃子とか事故米とかそういう騒動が結構あったので、基本的に“食”ってものを考えるようになって、まず食にありつく手段って都会で暮らしているとお金を介してでしかないですよね。金融危機で仮にインフレとかなっちゃったりすると紙くずになっちゃう。お金を持ってますよって言っても、紙くずだったら食べ物くださいって言っても貰えないってすごく危ういと思ったんですよ。都会で暮らすのってすごいリスキーだなと思ったんですよ。だから、生産者の人と近いところにいる、顔馴染みになるっていうのは、そういうリスクを軽減する手段だなって思って関心を持つようになったんです。そこから、自給自足とか農業とかに関心を持つようになって、自給自足しているコミュニティに出かけて行って、農業をちょっと遠農って形で体験させてもらったりして、そん中で農的な暮らしをしたいっていうのと、そのコミュニティの人がすごく心ってのを大事にしてて、悩みごとであったり良かったこととかもシェアしていくことを、すごく時間をかけてやるんですよ。夜に土日も関係なく。心の調和ってものによってそれができる。それによってたぶん世の中全体も、それができれば世の中もよくなるっていう考え方をする人たちで、その理屈にすごく共感した。だから、その農的な暮らしっていうのと心ってものに関わる仕事って何かないかなと思ってホースセラピーの仕事を見つけてこっちに来たんです。」

移住地の人びととの関係について述べる際、Aさんと違ってBさんは、次のように述べる。

「（石釜ピザも）販売って形をとっちゃうと、あともう売ると買うだけの関係性だとじっくり話とかあんまりできないじゃないですか。僕はあんまりそれが地域の活性化につながるのかなっていうところに疑問を持っているので、その地域側の要望としては売りたいって言う人もいるんですが、この辺の調整が難しいところです（……中略……）地域の人とどこまで価値観が共有できているかって言うと正直まだまだだなと思ってます。自分の評価と人からの評価が高けりゃ、それは生きがいかなって思う。いろんな人から評価される仕事がいいかなって思うけど、なかなか今それは石釜とかの評価は低いから……それが理解された時がたぶんすごいやりがいだなって思う。」

Bさんの移住のきっかけは、都市生活への危機感。社会や経済に暗い影をもたらしたリーマンショックや食の問題を機に、自給自足で生活するコミュニティとの関わりを持った。その中で彼は、そのコミュニティの人々が抱く「心の調和ができれば世の中も良くなる」という考え方に共感したと言う。そうした経験から、農的な暮らしと心に関わる仕事としてホースセラピーを選んだ。しかし、その仕事では生活していくだけの収入が得られず、地域おこし協力隊として隣町に移住。そこで始めたピザ焼き体験のサービスは、売る―買うだけにはない人とのつながりを築くためであった。そしてそれこそが地域活性化にもなると考えており、その考えを地域住民に受け

入れ評価してもらうことに生きがいを見いだそうとしていることがうかがえる。先の「心の調和によって世の中も良くなる」というコミュニティの考え方が反映されているように見える。

【事例 3】

東京から夫婦で移住してきた 30 代女性（以下、C さん）。夫とは田舎への移住を前提として結婚しており、移住は彼女自身の意向でもあった。東京では美容関係の事業を経営していた。島根県には地域おこし協力隊として移住しており、町のコミュニティセンターで勤務している。

C さんは、I ターンのきっかけについて次のように述べる。

「2・3 年前ぐらいからいろいろあって、土とつながった暮らし、食べ物をちゃんと作るような暮らしがしたいなっていうふうに思うようになっていて、準備を始めていたんです。うちは私も主人も東京育ちで実家も東京にあるんですけど、都会で育った者が都会を出るってのはなかなか大変なものであって、そのきっかけがつかめないでいたんですが、3 月 11 日の東日本大震災がきっかけになりました。東日本はこれからどうなっていくかわからないなって思ったことと、買い占めが起きたことなんかを見て、やっぱり食べ物を作っている場と離れすぎている不安がこういうことになっているんだよなっていうふうに見ていて、移住してやっていこうって決めたんです。」

さらに、I ターン生活について目指すことについては次のように述べる。

「もともと体のことの仕事をしてたのもあるし、なんか人が集まる場作りがしたいっていうのがうちにはあって、あと農業したいっていうのがあったので、まずこう農業していくことと、借りたおうちも広いので、そこで民泊とかそういうことをしながら、地域とつながること、地域がこう元気になることとつながった仕事を展開していきたいです。」

C さんは、美容の仕事をする中で、人間の基本は「食」であるということを考えるようになり、自分で食べ物を作る生活に憧れを持っていた。田舎への移住を決意させたのは、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災だという。食を生産する場と離れすぎていることへの不安が最大の要因となった。移住地では地域おこし協力隊として現在は働いているが、任期終了後は農業や民泊（民家に人を宿泊させ寝食を共にすることで、ホームステイのようなもの）などをしながら地域の人とつながる仕事をしたいと語っていた。先の B さんと同様に彼女もまた人とのつながりが地域を元気にすると考えており、人とのつながりを重視している。

60 代の A さんと 30 代の B さん・C さんでは I ターンの動機が異なる。確かにいずれも、高木（1999）が述べるような「自己イメージの追求・実現」、つまり自分探しや自己実現なのだが、田舎選択の理由として、A さんは、自然の中で農業をして自分の生活を楽しむためと述べていた。一方で、B さんや C さんの場合は、都市生活の危機感から田舎を選んでおり、彼らはそれを解消する手段として、人とのつながりを育むことをより強調していた。

山岡拓が、若者意識調査から「今の若者は表情や音声などの情報を増やすため、対面コミュニケーションを望む面がある。」（山岡 2009：158）と述べるように、今日の若者はコミュニケーションによるつながりを求めているといわれる。B さん・C さんも、そうした若

者の傾向を示しているのかもしれない。つまり、今日の若年層Iターン者の場合は、単に自然や農業ができる環境を求めて田舎に移住しているわけではないことが考えられる。

2．つながり

先に見たように、BさんやCさんは、「農的な暮らしと心に関わる仕事がしたい」「民泊など人が集まる場作りがしたい」など人とのつながりを強調している。Bさんの語りで「人からの評価が高けりゃ生きがいかな」とあるように、彼らは、自分探しのためにIターンを選んだのであるが、自分の価値観を受け入れ評価してくれる人とのつながりを持つことに関心を持っていることがうかがえる。

この点に関しては、バックパッキングと比較して考えてみたい。かつて若者の自分探しの手段としてはバックパッキングが注目されていた。バックパッカーは、数々の刺激やスリルの中で自己を壊すことを通じて新しい自分を見いだそうとしていた。大野哲也（2007）は、日本人バックパッカーの語りを通じて、未知の世界での冒険的なスリル満載の旅の中で困難を乗り越え無事に安宿に到着できた時の解放感は格別のものであり、不安感や恐怖感と安堵感の連続こそがバックパッキングの醍醐味だと考察している。そうしたスリルな経験の中にバックパッカーは自己変革を図っていくのだという。その具体例として、次のような語りが引用されている。

「旅は俺を成長させてくれるんですよ。カトマンズで全財産を騙し取られるっていう嫌なこともあったけど、もう全然なんとも思ってないですからね。あれがあったから俺の生きる道がみつかったというか……」（大野 2007：275）

騙されながらも、それがあったからこそ成長できたと語り、困難や苦痛をポジティブに捉えていることがわかる。つまり、バックパッカーは自己の内面に刺激をもたらすことで新しい自己を見いだしていこうとしていた。

そのように捉えると、BさんやCさんのようなIターン者のケースはこれとはまったく異なる。これらのIターン者は、自己の内面に新しい自分を見つけるというよりは、他者とのつながりの中に自己の居場所を見いだそうとしている点が特徴的である。

このような違いは、バックパッカーの場合はそもそも「自分が何者なのか」「自分が何をしたいのか」といった自己の不安定さから自分探しが始まっていたことに関連するだろう。それに対し、Iターン者の場合は、少なくとも表向きは「自分が何者なのか」といった不安定さは表さない。むしろ、しっかりとした理想の「自己像」を持ち、自信たっぷりにその自己像が語られる。Bさんは、農的な暮らしと心というものに関わる仕事がしたくて移住してきており、さらに次のようにも語っていた。

「（Web 制作の仕事は）それなりに収入はいいけど、地球に対して消費とかを刺激して環境を貪り食ってていうのはどうかなって思い、あんまり健全じゃねーなって思うようになりました。やっぱり自分が好きなことを応援するというような形でやりたいなと思い、自分で Web サイトを運営してみた。でもそれも本質的なことじゃなく、広告に乗っかって回しているので、やっぱり自分が一生産者に近い役割とか農業をそのサイトを通じて、若い人に関心を持ってもらおうとしたけど、それにしたってまず俺が農業やってみるとか、地域に入っていくのをやらんと説得力がないと思った」

彼らは、確固たる信念や価値観を示し、それを具体的に表現することに同調してくれる

人を求めているように見える。つまり、彼らは自分が理想として描き出す自己が他者に受け入れられることを求めているのではないか。彼らが追求する「自分」とは、他者によって認められる私のことなのである。彼らが求めているものは、「あなたは、このままでいいよ」という他者からのメッセージなのである。そして、彼らはそのような「自己」を受け入れてくれる環境が都会にはなくても田舎にはあると考えているようである。田舎の人たちは自分の考えや価値観に同調してくれる仲間のように捉えているように見える。だからこそ彼らは自らの考えを堂々とアピールしていくのかもしれない。

E.ゴフマンは『行為と演技』の中で、「パフォーマーは相互行為の間に、彼に求められている諸能力を表出することはもちろん、また相互行為の一瞬一瞬にもそのようにすることを要求されているのである。たとえばもし野球の審判が判定に自信をもっているという印象を他者に与えなくてはならないとすれば、一瞬でも間をおいて自分の判定を確かめるために考えるようなことをしてはならないのである」（Goffman1959＝1974：34）と述べている。これを踏まえると、Ｉターン者が明確に自分の価値観などについて語るのは、まさに自分の考えや価値観がしっかりしたものであるということをアピールするためのパフォーマンスなのかも知れない。自分の考えていることに少しでも自信のない態度を見せてしまうと、地域住民からの信用が低下することは間違いない。なぜなら、彼らが地域住民とは気心知れないよそ者だからである。常に一瞬一瞬のパフォーマンスが、住民にとってのＩターン者を理解するための要素になっているからである。よそ者という事実は変わらないＩターン者にとっては、　Ｉターン者個人としてのパフォーマンスと同時に、地域の一員としてのパフォーマンスも大事であると考えられる。

「来た当初は（地域での）草刈りの大切さが理解できなかったけど、地域おこし協力隊で岡山とかにいる人たちが、それをしっかりやってることで関係性を構築してるっていうのを見て、やっぱ大事なんだなって。地域の人の感情ってのもあって、この地域を守ってきたとか、これからも維持していきたいけどとか、いろんな思いがあって、そこを汲み取ることはまだまだ出来ていないっていうか……」（Bさん）

来た当初は地域での草刈りの大切さが理解できなかったと言うが、関係性を構築するための手段であることを知り、地域の人の思いや感情は汲み取れてないにも関わらず草取りが大事なことであるという認識へと変化している。そこにいる存在（住民たち）が自分を応援してくれる仲間だと思っているから、大切さが理解できなくても大事なものだと認識しようとしているのではないだろうか。また、E. ゴフマンは「パフォーマーが、相手が彼あるいは状況に関して抱いている想念には最終的に何らの関心もないまま、ただ別の目的のための手段としてオーディエンスの確信を探ろうという動機によって動いていることがある」（Goffman1959＝1974：20）と著述しているが、草刈りなど地域行事への参加が自分のやりたいことを実現するための手段でもあるのだ。彼らは努力をしてでも、自分の価値観を受け入れ評価してくれる仲間を得たいのである。

３．地域住民とのズレ

しかし、彼らの考えや理想像が地域住民にすんなりと受け入れられるわけではない。実際は彼らの価値観と住民の価値観にはギャッ

プが存在する。B さんの場合、石釜でピザ焼き体験ができるサービスを提供していた。体験型にした理由は、客とピザを作りながら一緒に話したりして交流でき、それが地域の活性化につながるのだと考えているからであった。そして、ピザ焼き体験のサービスについても住民の人たちに積極的に携わってもらうのが一番良いと考えている。だが、住民の反応は冷ややか。「地域側の要望としては売りたいっていう人もいる」と語っているように、地域住民にとっては売ってお金が入ればそれで良いという考えがあり、人との交流なんてものに価値を見いだしていない。しかし、I ターン者にとって、売る－買うだけの関係は、自らが疑問や危機感を抱いた都市生活と変わらず、そこに一つズレができる。また B さんは、ピザ焼き体験の値段についても、町内の人は高いと思っているということも語った上で、「いなかで過ごす体験という付加価値を付けることで、その値段は僕は適正だと思ってるんですよね」とも語っている。田舎ということ自体に付加価値を見いだす彼らは、やはりよそ者である。地域住民にとっては田舎の現実を知らない幸せ者にしか映らないのかも知れない。

敷田麻実（2009）も、よそ者を「地域というシステムから乖離している存在」とし、よそ者と地域住民との間にはズレが存在することを認めている。だが一方で、「よそ者をよそ者たりえる存在にしているのは、よそ者でも地域側でもなく、その両者の関係である。よそ者として認識された時には、既によそ者は地域とのかかわりを持つ、ある意味で地域内のアクターとなっている」と述べる（敷田 2009：84）。さらに敷田は、「一般に観光客をよそ者とは呼ばない。観光客は地域の仕組みや利害関係に多大な影響を与えないからだ」とも言っている（敷田 2009：85）。つまり、よそ者の移住者と地域住民との間にズレが存在するということは、移住者も地域住民との関わりの中で、地域に何らかの影響を与える存在になっていることは間違いないと言える。

しかし、ズレを埋めることができない限り I ターン者にとって価値観を共有できる仲間とはなり得ない。そのズレを埋めるには、自分のこだわりや価値観を捨て、「郷には入れば郷に従え」と言うように現地の文化に溶け込むことも方法の一つである。しかし、B さんは次のように語る。

「一緒にいて楽しい人たちがいいし、価値観を共有できる人がいいと思うんで、それが難しいなって思ったら多分そんなにその地域にこだわる必要もない。」

自分の価値観を受け入れてもらえないなら別の地域に移れば良いという考えを示しており、地域へのこだわりは全く持っていない。彼らは、他人とのつながりを求めていてもそれはあくまで自分を受け入れてくれる仲間でなければならないようだ。つまり、今日の I ターン者は「自分を受け入れてくれるところ」を探すことに関心を示していることが示唆される。

4．都市生活への不安

ただ、地域住民との意識のズレを感じながらも、彼らが人とのつながりを求める背後には、都市生活への危機感があった。11 年前に移住した 60 代の A さんのような高齢世代の I ターン者の場合、ただ農業をして自然の中でのんびりと暮らしたいという。要するに、第二の人生のステージとして田舎という場所が選択されている。だが、最近田舎へ移住した若い世代の B さんや C さんの場合、リスクに囲まれた都市生活への疑問と不安が移住のきっ

かけとなっていた。Bさんは「食にありつく手段は都会ではお金を介してでしかない」というが、同様の語りをCさんもしている。

「お金がないと生きていけないと思っていて、それって何かしらいつもどこかに不安を抱えているような、お金がなかったら食べていけない死んじゃうみたいな感じがありました。こっちはお金が無くても生活の不便はあるかも知れませんが食べていけるっていうのが実感としてあります。それがやっぱり底辺の部分での安心感になってて、そういうのがすごく大事だなって私は思うんです。」

彼らは、お金がないと生きていけないと語るように、都市生活を自分の生命をも脅かしかねない非常に不安定なものとして捉え、都市生活をネガティブに評価している傾向見られる。そんな彼らにとって田舎は、食の安全など安心感・安定感を得られる場所というポジティブなイメージが強調される。このような田舎へのイメージは次の語りからもうかがえる。

「地方の人が都会にあこがれるっていうのは、マスメディアの影響とか外的な要因がすごく多いと思う。だけど、都会の人間が田舎にあこがれるのは、マスメディアとかのそういう影響もないわけではないけども、それよりももうちょっと本能的なところからくるんじゃないかと思ってます。」（Cさん）

Cさんが「本能的」と語っているものは、人間としての原点のことである。彼女はエステティシャンとして、都会の人々が抱える体や心の問題に携わりながら、常に「人間としての原点」について考えていたと言う。そしてその原点が田舎にはあり、それが魅力や安心感につながっていることを強調していた。また、Bさんにおいても「木を燃やすってのが（生活の）原点」と語り、石釜ピザ体験にはそのような意識を人々に啓発する狙いもあると言う。本来の人間味あふれる暮らしが、田舎にはあると彼らは思っているようだ。不確かな都市に対して、確実なものが田舎にはあると考えられている。そしてその思いが彼らを田舎へと惹き付けているのかも知れない。

だが、彼らは田舎に住めばそれで安心を得るわけではない。彼らは人とのつながりやコミュニケーションも重視する。中山竜一は「リスク社会にあっては、ある日突然に誰もが加害者にも被害者にもなり得るがゆえに、リスクの現実化に備えた負担の分配について、事前の公共的な話し合いが必要となる」（中山2009：136）と主張している。中山の言う「公共的な話し合い」とは、専門家ではなく市民やNGO等の多様な関係者が参加しての開かれた熟議のことである。BさんやCさんの場合、都市が抱えるリスクへの不安が田舎移住の動機となっていた。そのため、彼らにとってリスクに備えた公共的な話し合い、すなわち他人とじっくり話し合い、他人と情報や意識を共有できる場を持つことは大事なことである。

「（東京では）町内会とかそういうつながりはないが、こっち（移住先）は町内会などのイベントが充実している」と語るCさん。町内会などは同じ地域に暮らす人々の集まりであり、中山がいう「多様な関係者が参加している場」とまでは言えないが、リスクの負担の分配について身近に暮らす人々とじっくりコミュニケーションを図り、情報を共有できる環境があるというのも、彼らが思い描く田舎の魅力なのだろう。

自分を受け入れてくれるか否かも重要な問題であるが、リスクへの不安を協働して解決していく仲間を得ることも、田舎が選ばれる理由にあるのかも知れない。ただし、前節で述べたように、Iターン者と地域住民の間には

考え方にズレがあり、田舎で仲間を得ることは容易ではない。

Ⅲ　結びにかえて

Ｉターンという自分探しについて、筆者がこれまでの調査で得られた語りをもとに分析を行ってきた。菅野仁は自分探しの心性の一つの典型として次のような例を挙げている。

「いまの自分はほんとうの自分ではない。ほんとうの自分の「生」はもっと輝き充実しているはずだ。そうしたほんとうの自分に出会えなければ、せっかくのこの私の人生がなんとなくむなしく感じられてしまう。だから＜いま・ここ＞の自分を取り巻いている環境や自分を縛っている考え方のスタイルを一度全部チャラにして全く新しい自分、だれとも違う個性的な私そのものを探し直すことはできないだろうか」（菅野 2003：89）

バックパッキングは、こうした自分探しの典型例だろう。しかし、本稿の事例で挙げたＩターン者の場合は、「ほんとうの自分」がわからないから自己探求するという自分探しではない。理想の自己像を自ら描き、それを「ほんとうの自分」であるかのように明確に人々に呈示する。ただし、それはいわば演技であり、「ほんとうの自分」として自分が思い描く自己を応援し受け入れてくれる仲間を求めていると考えられるのであった。

佐々木俊尚は、現代の消費行動についての説明で、「現代では、『私のライフスタイルをより豊かにしてくれるのか』『作り手の哲学が私に合っているか』といったように、『共感したものにお金を使う』傾向にシフトしつつある。極端に言えば、ダイヤモンドでもスポーツカーでも、本人の『共感』に結びつかなければ、それは無価値なものなのだ」（佐々木 2011：126）という。その上で、「社会との関係は接続と承認が中心になり、その接続・承認を補強するための手段としていまやモノは買われている」（佐々木 2011：126）と述べている。他者とのつながりを大事にし、そのつながりの中で自己を認めてもらうことを生きがいとするＩターン者の姿は、佐々木が述べる消費社会の変容を反映しているとも考えられるだろう。

近年利用者が増えているという Facebook や mixi などを利用すれば、自分と同じ価値観を持つ人と容易につながることができる。その点では、Ｉターン者の求めていることと同じである。だが、Ｉターン者が求めていたのは「実際に接触し」「顔の見える」つながりである。生産者と顔馴染みになることがリスクを軽減する手段という語りがあったように、ネットのようにいつ途絶えてしまうかわからないような不安定な関係ではなく、安定した関係を築きたいという思いが彼らにはより強いのだろう。そして、それが彼らの「地に足がついた自分」の前提なのである。

Ｉターン者についての事例分析を通して、今の自分を捨てて新しい自分（個性）を作り出すための経験に価値を置いてきた従来の自分探しとは違った、現在のリスク社会を反映しているような自分探しがＩターン者には見られることを示すことができた。彼らの自分探しは、自分の価値観を受け入れ評価してくれる仲間とのつながりを探すこと。その手段として、かれらが田舎を選ぶ理由は、仲間になり得るか否かはわからなくてもまた排除される可能性があっても、自分の価値観や考えを表現する場が田舎にはあるからだと考える。

もちろん、少ない事例から結論を急ぐべきではない。今後の研究課題は、ここで得た知見を、さらに聞き取り調査を行い多くの語りをもとに確かめていくことである。また、今

回の調査によって、Ｉターン者と地域住民との認識のズレについても示唆された。Ｉターン者と地域との意識や価値観のズレはこれまでも指摘されてきた問題であり、Ｉターン研究においては避けて通れない問題である。地域住民への聞き取りも同時に行い、実際に地域住民が抱いている意識についても確かめることで、今後のＩターン研究にも寄与できるものとしたい。

【注】

１）地域おこし協力隊とは、2009 年に総務省が創設した制度。2010 年度時点、2 県 88 市町村で 257 人が活動中。受け入れ自治体には隊員 1 人当たり最高 350 万円を支給。隊員の任期は 3 年で毎月 15 万円程度が支給される。

参考・引用文献

E・ゴフマン、1959、*The Presentation of Self in Everyday Life*、*Doubleday&Company*（石黒毅訳、1974、『行為と演技』、誠信書房）。

ふるさと島根定住財団、「くらしまねっと」（http://www.kurashimanet.jp/、2012 年 1 月 26 日アクセス）。

菅野　仁、2003、『ジンメル・つながりの哲学』、日本放送出版協会。

中山竜一、2009、「リスク社会における公共性」、飯田隆編、『哲学 10 社会/公共性の哲学』、岩波書店、129-149。

NHK「無縁社会プロジェクト」取材班、2010、『無縁社会』、文藝春秋。

大野哲也、2007、「商品化される「冒険」」、『社会学評論 58』、268-284。

小見志郎、2007、「田舎暮らし実現のための社会システムに関する研究」、『全労災協会受託研究報告書』、1-83。

佐々木俊尚、2011、『キュレーションの時代ー「つながり」の情報革命が始まる』、ちくま新書。

山陰中央新報、2012 年 1 月 11 日、朝刊。

敷田麻実、2009、「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」、『国際広報メディア・観光学ジャーナル』、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院、79-100。

高木　学、1999、「過疎活性化にみる「都市ー農村」関係諸相ーＩターン移住者を巡る地域のダイナミズムー」、『京都社会学年報第 7 号』、121-140。

立川雅司、2005、「ポスト生産主義への移行と農村に対する「まなざし」の変容」、日本村落研究学会編、『消費される農村』、農山漁村文化協会、7-40。

山岡　拓、2009、『欲しがらない若者たち』、日本経済新聞出版社。